

【花筏】はなみかだ

川の流りに桜の花びらが流れていく様を花筏といいます。花びらを筏に見立てての言葉です。川を下る筏に桜の花びらが散りかかる風景も花筏といいます。川合玉堂の奥多摩を描いた絵「春流し」（玉堂美術館蔵）にこの様が美しく描かれています。筏下りの船頭さんに山桜の花吹雪が舞い散る美しい絵です。

「花筏」という優雅な言葉は意外にも古歌には見られません。歌謡、俳諧の世界で生まれた雅語なのです。桜の名所、吉野と関わるものに多く見られます。

- ・ 吉野川の花筏 浮かれて漕がれ候よの、浮かれて漕がれ候よの 『閑吟集』より
- ・ 吉野川の花筏 竿さす隙もあらしな 岩波高き山風に 四方へちれる花の香

『淋敷座慰』より

花筏と聞けば宗旦好の「花筏炉縁」を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。高台寺蒔絵の意匠を模した黒塗蒔絵の炉縁です。棗などにお馴染の菊桐や楽器散らし文様などの意匠も高台寺の蒔絵を写したものです。菊桐文様は秀吉の好みで高台寺の調度品に見られます。楽器散らしと花筏文様は霊廟内陣の内弥壇、中央階段見付、丸柱などに見られます。高台寺御霊家は秀吉と北政所を祀る霊廟であることはご存知のとおりです。楽器散らし文様は浄土を表わす意匠であることは容易に察することができます。天女が楽器を奏でる浄土の様は阿弥陀来迎図などの仏画でお馴染みですね。このようにある場面の人物を取り去り、その人物・場面を象徴するものを描き残した文様を留守文様といいます。

では、花筏文様は何を表わしているのでしょうか。

東京国立博物館の竹内奈美子さんによると五節舞起源説など古くから吉野は仙境伝承があり、浄土と見なされていたそうです。高台寺の花筏文様は吉野川の花筏であり、楽器散らし文様と共に浄土を表わす意匠であるということです。

（「高台寺御霊家内陣における花筏・楽器散らし文様」『美術史研究 31』早大美術史学会刊平成5.12 所収）

高台寺御霊家の花筏文様は黒地に梨地と金地による蒔絵ですが、宗旦好「花筏炉縁」は筏の部分が朱塗であるところが特徴です。春の喜びを表すかのような豪華な炉縁ですね。

- ・ 高台寺蒔絵とて世人の賞翫するものは、東山高台寺の須弥壇に施せる花筏の蒔絵なり、今これを棗、炉縁などにうつしまかせるに甚優美にしてよろし

『秀嶺夜話』堀内松翁宗完

好み物には炉縁の他に玄々斎好「花筏平棗」八代宗哲造。甲のところに花筏蒔絵があります。「花筏香合」は淡々斎好。利斎造。溜塗の筏に花が朱塗、芯を金蒔絵で描いたものです。流派に偏って申し訳ない。

さて、宗旦好「花筏炉縁」を使う席はどのような道具が合うでしょうか。私なら平釜か釣釜。茶碗は桜高台の萩焼といったところでしょうか。旅簞笥など良いかも…。おいしいお団子も忘れずに。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~